

「『何とか前を』と励まし合う」

穴水町の住職に聞く

能登半島地震発生から1カ月が経った。震度6強の強い揺れに見舞われた穴水町の比良地区にある真龍寺(幽経一郎住職)と法栄寺(比良祐之住職)の様子を聞いた。

報が出たので、門徒さんや地域住民など50人ほどが避難してこられた。その夜は石油ストーブやたき火を囲んで不安な一夜を過ごした」と話す。

本堂は土壁が剥がれ落ちるなどし、余震などで倒壊の危険があることを示す赤紙が貼られる。幽経住職と家族は、比較的被害の少ない電気は復旧しているが、

能登半島地震から1カ月

断水は続いている。幽経住職は「公共施設などに避難している門徒さん、石油ストーブやたき火を囲んで不安な一夜を過ごした」と話す。

本堂は土壁が剥がれ落ちるなどし、余震などで倒壊の危険があることを示す赤紙が貼られる。幽経住職と家族は、比較的被害の少ない電気は復旧しているが、

同寺は高台にあり、地震後の津波警報で、門徒を含む地域住民30人ほどが境内に避難。石油ストーブを持ち出して暖を取りながら一夜を明かした。

また、庫裏の裏山が崩落し、土砂が建物に迫ったが、門徒らがすぐに駆けつけ、木材と台板で庫裏を囲い土砂の流入を防いだという。比良住職と家族は現在、その庫裏の被害の少ない部屋で暮らす。比良住職は「厳しい状態が続くが、すぐに駆け付けてくれた門徒さんたちの存在は大変に心強い」と話した。

「私も何か」と手作り募金箱

大分・浄周寺 小5寺族が報恩講で募金呼びかけ



「地震で困っている人に」と、大分県豊後高田市・浄周寺寺族の永松和花さん(小5)は冬休みに能登半島地震支援の募金箱を手作りし、1月14日に営まれた同寺の報恩講で募金を呼びかけた(写真)。

和花さんの父・秀康住職(62)はクリニックを営む内科・小児科医で、2011年、和花さんが両手で抱える募金箱に参拝者が次々と近づき協力していった。和花さんは「助けた気持ちばかりなも一緒なんだな」と話した。

集まった募金は秀康住職が本山の「たすけあい運動募金」に送った。和花さんは「食べ物とかトイレとか、石川県の人たちが今困っていることに使ってほしい」と、大分から心を寄せている。

令和6年能登半島地震 災害義援金送付先は2面